

現代企画室 本の栞



2020年5月発行

1977年に現代企画室が創業してから40年以上が経ちました。この間にもさまざまな大事件がありました。現在の新型コロナウイルスが生み出した状況は、世界の同時性を改めて強く感じさせるとともに、経済成長を唯一の価値基準とする社会がいよいよ終焉することを告げているように思います。情報が一人歩きし世の趨勢を決めていく世界で、本を通じた表現、手間もお金もかかる出版だからこそ果たすことができる役割をよく考え、これからも1冊1冊でいねいな本づくりを心がけていくつもりです。

2006年より14年間事務所をかまえた渋谷区桜丘から、代官山に拠点を移しました。固有の地域にしっかりと根差しつつも、視線は広く世界を見つめて、個性豊かな文化を発信し続けていきたいと思っています。

現代企画室

〒150-0033

東京都渋谷区猿楽町 29-18

ヒルサイドテラス A 棟 8 号

Tel: 03-3461-5082 Fax: 03-3461-5083

Email: gendai@jca.apc.org

http://www.jca.apc.org/gendai/

絵本・物語

2012年に末盛千枝子ブックスシリーズを立ち上げ、末盛千枝子さんが編集を手がける本を出版・復刊するとともに、それ以外の絵本や児童文学の出版にも活発に取り組んできました。子どもたちの世界に思いを馳せつつ、大人たちの心にも深く響くメッセージを届けてくれる作品たちです。

シリーズ「カオスオペラ」



『きみょうなこうしん』
『みずがあった』
『もうひとつのせかい』

長田真作著

2016年に絵本作家としてデビューして以来、次々と新作を発表し続けている長田真作。本シリーズは、作家が本当に描きたかった世界を描ききった渾身の作品で、絵本表現の可能性に挑戦した3部作です。

物語



『マコの宝物』

えきたゆきこ著

「日々、仕事というものに忙殺されているに違いないビジネスマンに、ふと立ち止まってこの本を手にとってもらいたい。ある山里の人々の暮らしを描いたこの“つくりものでない童話”に「豊かさとは何か」「生きるとはどういうことなのか」を静かに考えさせられると思うからである。」
(佐高信 日刊ゲンダイの書評より)

末盛千枝子ブックス

2017年に亡くなったM.B.ゴフスタインの作品が、いまふたび注目を集めています。子どもはもちろん、大人にも幅広く愛される絵本です。

『おばあちゃんのはこぶね』

「懐かしさとあたたかさ、少しのさみしさ。生きることのかなしみとよこび、素晴らしいさがじんわりと胸に去来する、美しい一冊。」
(子どもの本通信「dandan」の書評より)

『ゴールディーのお人形』

「ゴフスタインはいつも、自分をひたむきに捧げる人とその仕事を真摯に描いてきました。ささやかだけれど、大切なこと。だから、何度でも手に取りたくなるのです。疲れた体が極上のコンソメスープを飲みたくなるように。」
(ほそえさちよ『13歳からの絵本ガイド-YAのための100冊』の書評より)

『ピアノ調律師』

「伝記にも、ドラマの主役にもならないような、地道な仕事をするたくさんの人たちの声は小さく聞こえづらい。そこに光をあてて、しかも壮大なドラマに仕立てる作家の手腕にも感動します。何度読んでも、胸がいっぱいになります。」
(茅野由紀/書店員『MOE』の紹介より)

文学

1990年代の「ラテンアメリカ文学選集」を皮切りに、中南米やアジア、アフリカなど「辺境」の文学作品の翻訳出版に取り組んできました。カバーする地域、時代をさらに広げ、多様な世界の表現を紹介しています。

ラテンアメリカ文学

ポリビア新進作家のITサスペンスや植民地時代メキシコの修道女による詩集、ベネズエラの国民的古典などに続き、「ブーム」を象徴する巨匠たちの翻訳困難とされてきた代表作がラインナップに追加されました。



『別荘』

ホセ・ドノソ著 寺尾隆吉訳

「ラテンアメリカ文学ブームの核をなした作家の代表作、ついに登場。ドノソといえば『夜のみだらな鳥』。だが、それ以上に圧巻な一冊。だらだらと数ページずつ読むのもよし、一気に500ページ余を読みきってしまうのもよし。余韻の深さは痛烈だ。」
(野崎六助/評論家 日本経済新聞の書評より)

『大いなる歌』

パブロ・ネルーダ著
松本健二訳

「ネルーダの詩は朗読したときにその圧倒的な強度を最大限に発揮する。視覚表象されたメキシコの壁画に勝るとも劣らぬエネルギーを言葉たちが放つのがわかるからである。」
(野谷文昭/ラテンアメリカ文学研究者 図書新聞の書評より)

オーストラリア文学

2012年にスタートした「オーストラリア現代文学傑作選」シリーズは、これまで第6巻まで刊行しました。YAから歴史小説、殺人事件裁判のルポルタージュなど、多様な出自の作家の多様なスタイルの作品を紹介しています。

「舞台は1970年代のオーストラリア。嫉妬と羨望と絶望がせめぎあう青春を、喪失の時代と捉えた作品。だがここにあるのは絶望ではなく、かけがえのないきらめきなのだと思う。」
(金原瑞人/翻訳家 京都新聞の書評より)

『プレス』

ティム・ウィントン著
佐和田敬司訳



世界文学

ベルギー生まれのアナキストが克明に描く革命下のロシア、ギニア出身のフランス作家による歴史小説、ナチス支配下のハンガリーを生き抜いたユダヤ人一家の物語などなど。短編小説集から始まった、ポルトガル現代文学の新シリーズも好評です。



『仮面のダンス』

ティヴァダル・ソロス著、ハンフリー・トンキン編

「本書は、ハンガリーをドイツ軍が占領して以後、ソ連軍がブタペシュトを占領してドイツ軍を放逐するまでの10ヶ月を、最も困難な立場に置かれたユダヤ人のひとりであるティヴァダル・ソロスが、どのようにして生き延びたかを語る貴重な記録である。」
(三宅正樹 週刊読書人の書評より)

芸術・文化

全12巻(うち1巻は英語版)を予定する「中原佑介美術批評選集」をはじめ、社会との接点から美術、芸術のあり方を問うことをテーマに批評、芸術論、展覧会記録、地域芸術祭で活躍するアーティストの作品集などの刊行に取り組んでいます。

美術評論・芸術論

批評家・中原佑介が終生こだわった「人間と物質」は、リモート化が進むこれからの美術において重要なテーマになると思われる。旧ソ連に出自をもつボリス・グロイスの論集も、表現の成り立つ制度から美術と社会を読み解き刺激的です。



中原佑介美術批評選集⑨『大発明物語』

(BankART 1929との共同出版)

「科学の時代」において、科学と芸術はいかに影響しあうのか。科学を進展させてきた人間の本性と芸術的創造力は、どのような関係にたつのか? 暴走する技術と科学のあり方が問われている現在にこそ読まれるべき、京大物理学科で湯川秀樹に学んだ中原ならではの芸術論にして科学論。



『アート・パワー』

ボリス・グロイス著

「インターネットやソーシャルメディアを手にした私たちは、誰もが発言者でありキュレーターでもある時代を生きている。署名された便器や紙パックの模造品が芸術たりうるのも、「歴史的に与えられた文脈」に対して新たな文脈が提示されていればこそであって、文脈を整理する専門家の役割はますます大きくなっている。」(『SUMISEI Best Book』の書評より)

建築・美術・デザイン

原広司が「写経」を通じて展開する独自の空間論、横文彦が手がけたヒルサイドテラス50年間の記録、粟津潔の全作品カタログや展覧会記録(金沢21世紀美術館との協働)など、私たちの仕事に深い影響を与えた建築家、デザイナーにかかわる本を刊行しました。



『Hillside Terrace 1969-2019』

ヒルサイドテラス50周年実行委員会監修

「本書が伝えることは、建築がただの箱ではなく、それを創造的に活用する人々によって、生きた空間の器になったことだ。もちろん、これは民間が維持している特別な場だ。しかし、本来は公共の建築も、見習うべき重要なモデルではないだろうか。」(五十嵐太郎/建築評論家 中部経済新聞の書評より)



『HIROSHI HARA : WALLPAPERS』

原広司著

「本を開くと、文字も紙も色も、見たことがないほどに不思議で、しかも美しい。建築を考える上で重要とされたテキスト群が、原の手で書き写される。古くはホメロス、荘子から、新しきは大江健三郎まで及び、そのチョイス自体が多くを語る。」(隈研吾/建築家 朝日新聞の書評より)

アートによる地域づくり

大地の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭、いまや日本を代表する地域芸術祭となったこれらのプロジェクトの総合ディレクターを務める北川フラムが美術による地域づくりを考察した著作。アートによるまちづくりの手法のはじまりでもある「ファール立川」を加え、地域づくり3部作が揃いました。



『美術は地域をひらく』『ファール立川パブリックアートプロジェクト』

北川フラム著

『直島から瀬戸内国際芸術祭へ』

北川フラム、福武總一郎著

各地の地域芸術祭の記録集



日本海から瀬戸内海、日本の里山・里海に育まれた地域を舞台に、毎年芸術祭が開催されています。アートを活用して地域の魅力を再発見し、地域固有の文化のユニークさを世界の人びとに伝えていく、これらの地域芸術祭の記録集を刊行しています。

『大地の芸術祭2018』

『奥能登国際芸術祭2017』

『北アルプス国際芸術祭2017』

『瀬戸内国際芸術祭2016』

各公式記録集

地域芸術祭をきっかけに、アーティストたちが手掛けた作品から、数々の作品集や絵本なども生まれています。

『(空間絵本)学校はカラッポにならない』

田島征三著

「越後妻有 大地の芸術祭」屈指の人気作品、山村の廃校を丸ごとアートにした「空間絵本」が作品写真集になりました。1冊1冊がオリジナルの、「空間絵本」の分身ともいえる写真集です。

『磯辺行久 川はどこへいった』

磯辺行久著

1950年代、アーティストとしてデビューした頃の作品群から、1965年に渡米して以降の環境的な要素を取り組んだプロジェクト、2000年代のサイトスペシフィックなプロジェクトまで約60年に及ぶ活動を網羅する、地球環境時代を牽引するトップランナー初の本格的作品集。

世界を読む

インターネットの情報では届かない深度で、TVの国際ニュースとは異なる角度から、ラテンアメリカと日本を含むアジアを中心に、さまざまな国・地域の社会、歴史、文化を記録・報告するエッセイ、論文集、研究書などを刊行しています。

世界への視線



『ブラジル映画史講義』

今福龍太著

「南米の大国に花開いた独自の映画文化、その多彩な魅力が鮮やかに切り取られている。1930～80年代に作られた13本の映画から読み解く異色のブラジル論。」(松本良一 読売新聞の書評より)

『チェ・ゲバラの影の下で』

カネック・サンチェス・ゲバラ著

「革命家エルネスト・チェ・ゲバラ(1927-67)にはカネック・サンチェス・ゲバラ(1974-2015)という作家の孫がいた。なんと革新性に満ちた重い血統だろうか。政治的無関心と出国熱が高まるキューバの若者を考える上での必読の書。」(伊高浩昭/ジャーナリスト 週刊金曜日の書評より)



社会問題・国際情勢

新型コロナウイルスが明るみに出したのは、活発な交流と裏腹に進んでいた世界の分断、そしてその深刻さから目をそらされ、常に解決を先送りされてきた貧困と格差の問題でした。これらの問題は、一国内だけを見ていてはその原因を解き明かすことはできません。以下に紹介するのは、いま世界に起こっている問題をさまざまな側面から考えさせ、もしかしら解決のヒントを得られるかもしれない3冊です。



『抵抗と創造の森アマゾン』

小池洋一、田村梨花編

『娘と話す 世界の貧困と格差ってなに?』

勝俣誠著

『子どもと共に生きる』

アレハンドロ・クシアノヴィッチ著